様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６５８
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０９７０

研究課題名（和文）明治期大名華族の海外留学と地域再生

研究課題名（英文）Daimyo Nobility's Study Abroad and Regional Reproduction in the Meiji Era

研究代表者
熊澤　恵里子（Eriko, Kumazawa）

東京農業大学・その他部局等・教授

研究者番号：９０３２８５４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　越前松平家3代（慶永・茂昭・康荘）にわたる家譜並びに康荘海外留学関係書類、慶永日簿等の国内史料と英独墺の国外史料を収集・リスト化し一部翻刻を行い、大名華族の伝統的な子弟教育に翻弄された康荘の実際を辿ると共に、康荘の留学が衆議により旧領地福井の地域再生の方途として、私有地（城址）活用による試農場経営に生かされ、併設された園芸伝習所も含め民間モデルの先駆けとなったこと、及び、康荘随伴の旧臣にとって渡欧は「変則的な海外留学」であったが、自由闊達な学問研究と藩閥を越えた在外日本人ネットワーク形成を可能とし帰国後の近代化の一翼を担ったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I collected, organized, and transcribed documents at home and overseas (Japan, the UK, Germany, Austria) that related to three generations of the Echizen Matsudaira family (Yoshinaga, Mochiaki, Yasutaka). I retraced the footsteps of Yasutaka, who had received the childhood education of Daimyo nobility. As a regional reproduction measure, Matsudaira's old territory, Fukui, put private land (castle ruins) to use as an experimental station. The station took advantage of Yasutaka's study abroad in chemical analyses and was a role model of the private sector, including the institute of horticulture. I also clarified that the retainers who accompanied Yasutaka to Europe sometimes studied abroad, but played a role in the modernization after returning home.

研究分野：教育史

キーワード：明治日本の近代化　高等農学教育史　産業教育史　松平康荘　大名華族の子弟教育　エドワード・キンチ　越前松平試農場　家臣たちの海外留学

１．研究開始当初の背景

明治期の大名華族に関する研究は、近年研究成果が蓄積されつつあるが、各家や個人のプライバシーの問題もあり、全て公開されているわけではない。しかし、研究代表者・熊澤は、長年福井藩・福井県をフィールドとした教育史研究に取り組んでおり、松平家及び関係諸機関の協力を得て越前松平家３代（慶永・茂昭・康荘）にわたる国内史料を閲覧する機会に恵まれた。また、下調査により、松平康荘の留学先である欧州にも関係史料があることが判明し、国内外の調査による総合的研究の可能性を確信した。

2009 年渡英した熊澤が王立サイレンセスター農学校で康荘留学中の集合写真 2 点を発見したことが福井新聞に掲載されて以後、民間農事試験場の先駆である松平試農場（1893 年 5 月福井城址に創設。以下、試農場と略す）への福井県民の関心が高まった。福井城址から山室へ移転後の試農場で幼い頃遊んだ記憶があるという年配女性の投書、またロンドン万博（1910 年）で入賞した康荘論文『柿の栽培』が福井県文書館で展示される等、地域の人々は試農場に少なからず愛着を感じている。『越前松平試農場史』（1993 年）が試農場創設後の変遷を辿っているが、大名華族子弟がなぜ自ら農学修行を行い、帰国後試農場を創設したかについては、推測の域を出ない。この課題に関しては、国内外の調査による本格的アプローチは未だなされておらず、各専門分野からの解明が求められる。

本研究代表者・熊澤は、福井藩ならびに松平康荘についても、論文を発表する等、実績を残している。教育史分野においては、大名華族の子弟教育に関する研究はこれまでなく、熊澤が初めてその内容と教育史的意義を論じたといえよう。本研究では大名華族の子弟教育研究をさらに深化させ、子弟の海外留学が地域再生にどう生かされたのか、地域論としての視点からも解明する。

大名華族の家制度に関する研究は日本史分野で蓄積されているが、本研究代表者・熊澤は、康荘の教育を指揮した祖父慶永が最善の教育を模索し意見を求めた福澤諭吉に注目した。福澤の教育理念は「独立自尊」であり、大名華族の家の存続とは対立する思想をも有していた。

２．研究の目的

(1) 本研究の目的は、明治期大名華族の海外留学が旧藩における地域産業の復興や新たな産業の創出へつながる近代科学の修得を担った事例があることに着目し、留学がどのような目的を持って実施され、その成果が地域再生のためにどう生かされたのかについて、国内外の調査を中心に明らかにするものである。

(2) 明治期大名華族の中心的存在であった越前松平家における家督相続人松平康荘（1866 年 2 月生）が受けた教育の実態を追究し、17 歳で渡欧した康荘が実践の学としての農学を学び、帰国するまでの過程を丹念に辿ることにより、海外留学が大名華族子弟にどのような意識変革をもたらしたのか、大名華族の子弟教育が時代の変化にどう対応したのかを解明する。康荘が学んだ慶応義塾、福澤諭吉の思想的影響の有無についても実証的に検討する。

(3) 康荘帰国後の試農場創設過程とその実態及び地域産業との関連性について解明する。留学の成果はどう生かされたのか。福澤諭吉の教えは、康荘の思想と行動に影響を与えたのか。

(4) 康荘の試農場創設に追随する華族が現れた事実を踏まえ、越前松平家を中心とした大名華族ネットワークの中で、子弟教育に関する情報交換がどのように行われ、共有化されていったのかについて追究する。

(5) 康荘に随伴して渡欧した旧臣及び子弟並びに康荘学事監督らの渡欧先での行動と学問研究、人的ネットワーク形成及び帰国後の地域再生との関連性について、実態を解明する。

３．研究の方法

(1) 国内史料調査の実施

国立国会図書館ならびに国立公文書館、外務省外交史料館、福井県文書館、福井市立図書館、福井市立郷土歴史博物館等を中心に、松平慶永・茂昭・康荘並びに試農場関係史料の収集、リスト化、一部翻刻に取り組むと共に、明治政府の農業教育・農学教育に関する方針と試農場における農学教育について検討を行った。

(2) 国外史料調査の実施

①　康荘の留学当初の渡航先であるオーストリア、ドイツ、農学修行先である英国を中心に史料収集を行い、康荘が何を見聞し、何を学ぼうとしたのかを詳細なフィールドワークによる解明を試みた。特に、学校休暇中に度々訪問しているコッツヲルズ地方の教区等についても地理的・産業的な位置づけを行った。

②　康荘が留学した農学校の教育内容に関する史料収集を行った。康荘が苦手とした「化学」とはどのようなレベルなのか。当時すでに日本の高等教育はドイツに傾倒しており、英国で学ぶ理由はどこにあったのか。当時の欧州における学問としての農学及び高等教育における農学教育の位置づけを検討するために、帝国大学教授陣の主な出身地であったドイツでの調査も実施した。

③　英国留学中の康荘の学事監督を務めた武生出身の元第一高等中学教諭松本源太郎の『英国留学日記抄』の記述を手掛かりにし

て、康荘の農学校での勉学と生活及び源太郎のオックスフォード大学での勉学と人的ネットワークを辿った。特に、オックスフォードとロンドンにおける源太郎の交友関係と行動範囲を実際に地図にトレースすることにより、彼らの関心事を解明した。

(3) 主な国外史料調査先・訪問先は次の通り

① ドイツ

ベルリン国立国会図書館、同公文書館、ベルリン自由大学、ライプチヒ大学図書館、ロストック大学図書館・文書館、オスカー・ケルネル研究所、ホーヘンハイム大学文書館。

② オーストリア

国立公文書館（ウィーン）。

③ イギリス

大英図書館、国立公文書館、ロンドン大学、オックスフォード大学ボドリアン図書館、同日本研究図書室、同植物学研究図書室、同マンスフィールド・カレッジ図書館、同ニッサン日本研究所、オックスフォード・ユニオン文書館、オックスフォード州立歴史センター、ケンブリッジ大学図書館、ヘーゼルメア市立図書館・文書館、グロースター州立文書館、チェルトナム図書館、ストーンハウス図書館、スウィンドン図書館、エジンバラ大学図書館、ストラウド図書館、ロンドン市立文書館、ミッチャム図書館等。

４．研究成果

大名華族の事例として、研究目的に掲げた項目を中心に史料調査を実施し、各所蔵先と所蔵史料をリスト化し、一部翻刻を行った。加えて、国外調査を精力的に実施し、康荘及び農学教育に関する新たな史料を見い出し、以下のような研究成果を導き出した。

(1) 明治期大名華族の子弟教育の実際を明らかにした。

① 松平康荘の教育を巡り、祖父慶永と父茂昭の間に確執が生じた。

松平家関係史料により、家督相続人康荘の教育を巡り祖父慶永と父茂昭の確執があったこと、康荘の教育は慶永や旧臣の手厚いケアにもかかわらず困難な状況にあったことが明らかになった。その意味において、1884 年 1 月、康荘 17 歳でのドイツ陸軍修行の決定は、家督相続人康荘に用意された究極の選択だったといえよう。松平家保護を一番に望む慶永と旧臣にとって、康荘を未来の当主に相応しい人物に育て上げることが最大の教育の目的であった。

康荘は個人の資質への配慮は全くされないままに、幼少時から最高の教師に付き勉学を修めた。家督者にふさわしい教育を模索する祖父慶永は、縁日や芝居見物等を許す父茂昭に対し怒りを隠せない。慶永は後述する福澤諭吉の助言に従い旧臣宅に康荘を寄宿させ、康荘専用の学問所審慎学舎を開設した。一方、康荘学事担当の旧臣 3 名は、教育指導はあくまでも松平家の意向並びに衆議に従うという方針に異を唱え、辞意を表明した。彼らは本件に関連し、解職時に下賜された贈品を全て固辞し返納している。これは贈答行為という慣習の否定、すなわち、恩・礼を媒介とした主従関係からの脱却として捉えることができる。

② 松平康荘の農学修行は、松平家内の新旧意見の対立を生んだ。

康荘の陸軍修行から農学修行への転学は、松平家及び旧臣たちに大きな失望と苦悩をもたらした。これは実際にはケンブリッジ大学に入学できなかった結果ではあるが、松平家の衆議は全てにおいて「家の保護」と面子を優先しようとした。福澤諭吉が子息一太郎の「個人の幸福」を最優先したこととは全く対照的である。現地の康荘後見人八田裕二郎は、康荘の適性を無視した面々に憤慨し、後見人を固辞した。以後、旧態然とした大名家の手法は、時代の変化に対応できず、確実に求心力を失っていったのである。

③ 松平家の意思決定は、すべて旧重臣の衆議により決定した。

松平家では康荘の留学をはじめ、全ての協議事項が家令・家扶・旧重臣らによる衆議で最終的に決定されており、慶永もこれに従っている。この方法は慶永・茂昭が亡くなる 1890 年以後も保持され、康荘が福井移住を行った 1894 年まで遵守されていた。康荘が後年回顧し批判した「悪風習」「悪風」とは、旧大名家の伝統やルールに拘り時代の変化を甘受できない強固な特権意識を指すのではないだろうか。康荘が言う「悪風」を支えた伝統的な規範意識は、慶永子息慶民が分家を立て、慶永・茂昭に仕えた旧臣の多くが死去し世代交代が進むなかで希薄化していくのである。

④ 松平康荘の教育について、松平家の依頼により福澤諭吉が助言を与えた。

史料調査により、康荘関係史料の中に康荘の教育に関する福澤諭吉への聞取り書きが見つかった。本来は火中に投じるべきものであると記されている。文脈から康荘が慶應義塾幼年局へ入学する直前の 1876 年 10 月 19 日に認められたものと考えられ、教育史的にも大変貴重な史料である。

福澤は 12、3 歳までは「身体の教育」と「智心の教育」が大事であると述べ、息子一太郎と捨次郎を例に自身の教育論を展開している。具体的には①器械運動、馬術、水練をさせる（小春をあてがい米をつかせるのもよい）、②塾には入れなくともよい（塾の書生に悪習あり。「買喰い」はよくない）、③語学は外国人に習う、④漢籍の講談を聞かせる（暗記させるのではなく）等で、康荘の教育については、まだ 10 歳なので「身体の教育」が肝要であると言い、近隣の塾へ今すぐ入塾させるのではなく、親切な旧藩士宅へ預け、家人同様の教育を施すよう勧めた。旧藩士へ依託する際に「御殿風」は一切廃止し、世間

一般の「子供風」にすることが第一であるという。福澤は「御殿風」という言葉に、門閥主義への批判を込めたのではないか。福澤は康荘の教育については、漢学も否定せず、大名華族の現況にあった緩やかな教育論を展開しており、旧藩時代を熟知した福澤ならではの「特別な配慮」がうかがえる。

(2)　大名華族の海外留学の実態を解明した。

①　陸軍修行の実態

松平康荘の陸軍修行は、横浜からの船内のドイツ語の個人教授に始まり、ウィーン、ベルリン滞在中もほぼ語学修得に終始したと考えられる。

②　英国王立サイレンセスター農学校での修行の実際

現地調査により、当時のカリキュラム及び康荘の成績表等すべてを収集した。康荘は日本で化学等、いわゆる理化学系の科目は一切学習経験がなかったため、実習系科目以外の成績は思うように伸びなかった。デイプロマ取得コースに在籍するまで進級したが、出席せず、卒業せずに帰国している。

③　英国王立サイレンセスター農学校における農学教育は当時のトップレベルの水準を誇った。

王立農学校は、世界的にも有名なローザムステッド農事試験場と連携し、イングランドのカレッジとしてはレベルの高い農学教育を行っていた。特に化学分析は高度なものだった。化学を担当したのが、駒場農学校御雇教師として活躍したエドワード・キンチ教授である。キンチは王立化学校で勉学後、王立農学校化学教授チャーチの助手や王立化学校助手等を経て駒場農学校へ赴任し、チャーチの退職後に呼び戻され化学教授に着任したのである。キンチは、康荘在籍中に王立農学校を訪れた日本人の世話を焼き、駒場農学校の教え子である横井時敬とも長年の文通があった。駒場農学校でキンチの後任となったドイツ人オスカー・ケルネルは、キンチの親友でローザムステッド農事試験場化学者ワーリントンとも交流があった。

ワーリントンはイングランドの総合大学に農学部を設置するために奔走したが、英国では実現しなかった。当時、世界の農学教育において注目されていたのは、リービッヒが提案した改革により、いち早く総合大学に農学部をおいたドイツであった。農芸化学者も国を越えて（これは現在も、そしてあらゆる学問分野でそうであるように）研究データや意見交換するなかで、イングランドの総合大学への農学部設置を望んだのである。

本研究代表者・熊澤は、当時のドイツにおける農芸化学及び大学農学部について文献収集を行い、駒場農学校・東京農林学校・帝国大学農科大学教授オスカー・ケルネルに関する史料を数多く発掘した。ケルネル研究所があるロストック大学は、かつての旧東ドイツに属していたこともあり、熊澤がオスカー・ケルネル関係史料を閲覧した最初の日本人研究者となった。同じくホーヘンハイム大学文書館でも、オスカー・ケルネル関係文書から、駒場農学校への農芸化学教師採用時の契約書の写しを発見した。

(3) 大名華族に随伴した家臣にとっても「変則的な海外留学」の機会となった。

①　康荘の学事監督松本源太郎はオックスフォード大学の特別生となった。

松平康荘の留学に際して、日本から派遣された学友、学事監督ら随伴者は康荘の世話をする傍ら、自らの学問研究や産業視察に励んだ。その経験が帰国後自身のステップアップ、ひいては日本の近代化の一助として生かされたことから、随伴が「変則的な海外留学」の機能を果たしていたことが指摘できる。当時の海外留学は年間およそ 1000 円を要しており、誰もが参加できるものではなかった。

康荘の学事監督として 1889 年 4 月下旬に英国へ発った武生出身で元第一高等中学教諭松本源太郎は、英国到着の半年後には、康荘と関係なくオックスフォード大学マンスフィールド・カレッジの特別生として講義に出席している。源太郎が誰の紹介により特別生になったかは不明であるが、バラ塾（明治学院）に在籍していたことから推測するに、教会ネットワークにより実現したものと考えられる。第一高等中学では、論理学、心理学、中国史学を担当しており、渡英に当たっては辞表を提出し、非職となった。オックスフォードでは倫理学、美術史等を学び、1892 年 12 月に帰国後は第一高等中学教授兼高等師範学校教授等を経て、1899 年 4 月には第五高等学校教頭、1 年後には山口高等学校校長として赴任した。その後、東京女子師範学校校長、学習院大学教授を務め、後進の教育に邁進した。随伴者としての渡英は、源太郎の勉学熱を満足させ、特別生という自由な立場で、学問研究を行うことを可能とし、帰国後の教育者としての原動力にもなったと考えられる。

源太郎は役員推薦によりオックスフォード・ユニオン・ソサエティへ入会し、ソサエティの討論会やラウンジを利用する機会を得ている。非正規生としては破格な待遇を得ており、これもマンスフィールド・カレッジの教授陣並びに教会ネットワークのサポートによるものと推測できる。本研究では、康荘、源太郎と教会に関する調査は時間的な制約もあり、解明するまでに至らなかったが、この点については今後の課題としたい。

②　随伴者たちは英国の近代産業・文化・市民生活を視察し持ち帰る役割を担った。

源太郎の日記からは、源太郎がサイレンセスターの他に、オックスフォード、ミッチャムにも下宿先をキープしていたことがわかる。サイレンセスターでは教会の裏手の貧民街に、オックスフォードでは中心街から徒歩 20 分程離れた湿気のある川近の下宿であっ

た。ミッチャムはロンドン南部で、インドや中国等植民地からの移民が多い。源太郎が居住したザ・チェスナットというアパートは、英国で第１次大戦後に開発が進んだ最新鋭の中産階級用アパートメントで、ゆったりとしたフラットと中庭が特徴的である。

同じくロンドン南部のクラプハムでは、ホテル兼飲み屋を集合場所とし、定期的に会合を開いている。会合内容は不明だが、クラプハムは中産階級と労働者階級の街であり、コモンと呼ばれる共有地（庭園）を中心としてアパートメントが建つという地域コミュニティが形成されており、これらを日本の新しい地域社会づくりの参考にしようとしていたとも想像できる。これらの地域は、英国における新たな中産階級・労働者階級のためのモデルともなっていた。

源太郎はロンドン北部の鉄道駅を中心として整備された中産階級の新興住宅街を度々訪れている。ハムステッドヒースは広大な田園風景が広がる高級住宅街である。また、現在慈恵医大と連携し日本人向け診療所が設けられているセント・ジョンズウッド病院や、セント・トーマス病院に滞在（勤務）していた日本人とも交流があった。当時ナイチンゲールの看護方法やサナトリウムも普及しており、日本からも新しい看護法、治療法を学びに渡英していたと推測できる。

王立農学校のあるイングランドのコッツヲルズ地方にも日本人は滞在している。康荘と源太郎も何度となくこの地を訪れている。当時、ストラウドを中心とするこの地方は、織物産業のための紡績機製作の会社が手広く工業部品等の製造を行っていた。康荘が足繁く通ったニンプスフィールドには、テキスタイルの工場があった。福井に設置された機織工場や工業所等の参考にされたと推測できる。

(4) 福井移住後の松平康荘と共に歩んだ松平試農場と地域再生の歴史

① 松平試農場前史

松平試農場の創設は、康荘の英国農学修行を帰国後地域産業に生かすことを目的として松平家所有の城址に開設したものであり、試農場は駒場農学校出身の技師を雇用し、最新の分析化学の実践の場として、当時全国に展開しつつあった華族立農場のモデル的存在となった。明治期に創設された主な華族・新華族農場は 25 件にも及ぶ。康荘が農学修行を選択した理由は、「農は立国の大本」という祖父慶永の意思を継いだものであり、渡辺洪基らの助言によるものと考えられるが、収集史料を分析する過程で、試農場創設以前に当地において、いわゆる農事試験場的な施設が存在していたことが判明した。

1878 年 10 月に石川県福井勧業試験分場が設置され、浅田外吉が 10 年契約で石川県勧業課から果樹園及び園試験所を委託されたことを示す史料が見つかった。詳細は今後の課題としたいが、後の松平試農場が果樹栽培を中心とした試農場であることからも、この福井勧業試験分場は、松平試農場前史として位置付けることができるのではないだろうか。

② 松平試農場が華族立農場のモデルとなる。

康荘は 1892 年 12 月に英国から帰国して 1 週間後に結婚式を挙げ、1895 年 5 月に福井へ家族共々移住した。福井移住の理由は、かねてから旧重臣らと合意していたもので、福井重視と経費節約、城址保存を目的としていた。

1893 年に創設した試農場は、康荘移住後は人的な補充も行われ、組織化が進んだ。1897 年には、石川県松任農事試験場長、逓信大臣、農商課長等が試農場見学に来福している。1898 年 2 月には農学士山田惟正を試農場監督として年俸 840 円で招聘した。全国各地からの試農場見学者は年々増え、松平試農場の取り組みは全国的にも注目されていたことがわかる。1907 年には園芸伝習所を設立し、全国から伝習生を受け入れた。伝習所における理論と実践の修得は、私立の産業教育・実業教育の先駆として評価できる。1900 年 1 月には「試農場柳行李伝習所」という記述があり、福井特産物の製造と教育を目的とした機関が試農場内に設置されていたことがわかる。

③ 康荘自身も主体的に試農場ならびに地域産業の発展に努めた。

康荘は試農場に松平家当主として名を連ねただけでなく、英国農学修行で身に付けた理論と実践を実際に活用した。帰国後の 1893 年に西ヶ原農業試験場を視察する一方、度々帝国大学農科大学助教授長岡宗好を招聘し農学講義を聴講している。また、大日本農会特別会員に入会し、福井県の農学校の行事等に参加する等、農業や農業教育の振興に積極的に取り組んだ。1898 年には、岐阜市在住の昆虫学士名和靖の研究所を訪れ、害虫等を見聞している。1904 年 8 月、康荘は大日本農会会頭を嘱託された。1907 年以降は園芸にも力を入れ、各種品評会を実施している。

また、福井の近代産業を支える桑蚕会社、練工場、機織場、工業試験場等も盛んとなった。松平家は地域の産業・文化・教育を担うあらゆる制度・組織に経済的援助を行っている。1908 年に図書館が落成し、松平家所蔵の書籍も多数図書館で保管された。康荘は自分の子弟を全員地域の公立小学校へ入学させ、妻節子と共に、小学校・中学校・農学校等の様々な行事に参加している。小学校に各種標本等を寄贈し、教育環境の向上にも寄与した。

明治期の松平試農場は、地域産業の理論と実践の要であり、地域再生の方途を探っていた他地域のモデルケースともなった。試農場を中心とした地域再生は、松平康荘の海外留学の経験と、家族全員が福井へ移住し、「地域重視、経費節約、城址保存」を目に見える形で具体化したことにより、成立したものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
① 熊澤恵里子、農の思想と人民の幸福、日本教育史往来、査読無、第 211 号、2014、pp.3－5

② 熊澤恵里子、大名華族の子弟教育―越前松平康荘の自立への道― 、明治維新史研究、査読有、第 11 号、2014、pp.17－27

③ 熊澤恵里子、越前松平康荘の英国留学と試農場の創設 、地方教育史研究 、査読無、第 34 号、2013、pp113－123

④ 熊澤恵里子、沼津と英学、東日本英学史研究、査読無、第 12 号、2013、pp.19－32

⑤ Kumazawa,Eriko 、 Making Citizens in Modern Fukui: An Aborted Attempt at Local Citizens' Cultivation（英文）、Educational Studies in Japan International Yearbook（英文紀要）、査読有、vol.7、2013、pp.51－64

⑥ 熊澤恵里子、他国修行―福井藩教育改革の軌跡―、福井県文書館研究紀要、第 9 号、2012、査読有、pp.1－28
http://www.archives.pref.fukui.jp/fukui/08/2011bulletin/kiyou9_kumazawa.pdf

〔学会発表〕（計５件）
① 熊澤恵里子、家臣たちの海外留学―越前松平康荘学事監督松本源太郎の英国修行―、2015 年 2 月 19 日、平田研究会月例会、平田神社（東京都渋谷区）

② Kumazawa,Eriko、The Education of the New Nobility in the Meiji Era: Matsudaira Yasutaka’s Study in England（英語）、EAJS Conference in Japan（ヨーロッパ日本研究協会国際大会）、2013 年 9 月 28 日、京都大学（京都市）

③ 熊澤恵里子、駒場農学校化学教師キンチとケルネル関係史料から見た高等農学教育の実際とその史的意義、日本教育史学会例会、2013 年 1 月 13 日、謙堂文庫（東京都）

④ 熊澤恵里子、明治期福井の学校・文化・産業と越前松平家―家督相続人康荘の教育と松平試農場の創設、全国地方教育史学会第 35 回大会公開シンポジウム：明治期、地域の学校・文化・産業と華族（大名華族）、2012 年 05 月 27 日、和洋女子大学（千葉県）

⑤ 熊澤恵里子、沼津と英学―新しい市民層の創出、日本英学史学会・東日本支部・沼津大会、2012 年 03 月 17 日、ホテル沼津キャッスル（静岡県沼津市）

〔図書〕（計２件）
① 熊澤恵里子　他、勉成出版、近代学問の起源と編成、2014、pp.169－198、総頁数 pp.444
② 熊澤恵里子　他、福井県文書館、福井県文書館資料叢書 10、2014、pp.313－321、総頁数 pp.323

〔その他〕
ホームページ等
http://dbs.nodai.ac.jp/html/76_ja.html

６．研究組織
(1)研究代表者
熊澤　恵里子（KUMAZAWA, Eriko）
東京農業大学・その他部局等・教授
研究者番号：９０３２８５４２

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：